

# チェコ共和国に於ける『東海道四谷怪談』

—ヨエ・ホロウハ著『オユヴァイナリダイミヨウジン』をめぐって—

ペトル・ホリー

## 一 はじめに

本稿題目として、日本愛好家、作家、そして美術蒐集家としての業績を為し遂げたチェコ人 Joe Hlouha (一八八一—一九五七) をとりあげるのには、二つの理由からである。一つには、ホロウハはチェコに於いてはじめて『四谷怪談』を紹介した。一九二〇年のホロウハ著作『恐怖の東屋』(Pavilion Hruky) の中の一話で、『オユヴァイナリダイミヨウジン』と標題されているホラー短編はまさに『四谷怪談』から題材を借りている。二つには、ホロウハがとらえた『四谷怪談』は、その後学術的に紹介された戯曲の翻訳より大きな衝撃を与えた。

チェコ語で書かれた『四谷怪談』をテーマにしたものはこれまで短編が二つ、戯曲としての翻訳が一つある。出版年順に紹介しておこう。一九二〇年にホロウハの『恐怖の東屋』が出版された。戯曲としての『東海道四谷怪談』紹介されたのは、一九七五年にブラハで出版された『松風—日本の演劇』<sup>3)</sup>である。本書は、チェコ共和国(以後、チェコと略す)において、日本の演劇を紹介する学術書としての基本著書でもある。一九八六年に出版された Jik Janos 著『日本に興味を持つための99話』<sup>2)</sup>にも、『四谷怪談』を題材にした『古き江戸の恐ろしい幽霊お岩』という話が掲載されている。

普段は、日本趣味的な、今で言えば安っぽい感傷的表現で綴られた本を書いたヨエ・ホロウハが、恐怖というテーマを選んだことは、早稲田大学大学院文学研究科芸術学演劇映像専攻で歌舞伎、特に『東海道四谷怪談』の怪奇現象を研究している小生の興味を深く惹いた。前述した日本演劇の学術書『松風—日本の演劇』に於いて紹介された『東海道四谷怪談』の翻訳は、全編ならぬ部分訳であり、人間のドラマとして評価の高い四幕目の「深川三角屋敷の場」がその中心となっている。『東海道四谷怪談』の翻訳から削り取られた怪奇性がホロウハの『オユヴァイナリダイミヨウジン』にはあった。同じチェコ人である小生は、ホロウハの生温い描写に恐怖を感じている。本稿の志向として、ヨエ・ホロウハの人物像及び『四谷怪談』への関心を紹介することとし、日本語への初訳となる『オユヴァイナリダイミヨウジン』の拙訳を付録とする。

## 二 ヨエ・ホロウハの生涯

十九世紀のチェコは十七世紀から続くハプスブルグ家による支配下にあり、オーストリア・ハンガリー帝国に分断統治されていたにもかかわらず、「民族再生運動」が著しく行われた。また、遙かなる外国を知ろうという動きが文学などでしばしば見られる。日本に関する知識はチェコの地に主として外国から間接的な道を辿って入っていた。他のヨーロッパの国々と同様、十九世紀後半にチェコでも「日本」を題材とする旅行記というジャンルが流行っていた。A.B. ミットフォード(一八三七—一九一六)著『Tales of Old Japan』から題材を借りて、チェコの作家・詩人である Julius Zeyer (一八四一—一九〇一) は、チェコ初の日本趣味的小説(ジャポヌリー)、『ゴンパチとコムラサキ』(Gonpaci a Komurasaki) を一八八四年に出版し、一九三九年までの間、九つの再版を重ねた。また、ヨゼフ・コジェンスキー(一八四七—一九三八)は若い頃から古生物学などに携わり、教職に従事する傍ら、ヨーロッパ各地、一八九三—四年に世界一周旅行をした。明治二六年十月二日に外国人旅行免状、十月六日に「奥太利国ボヘミア州官立学校長」と宛てた紹介状を手に日本各地を視察し、視察記録書<sup>7)</sup>を出版した。日本の伝説、間接的に紹介された文学、浮世絵などに影響された日本趣味的文学によって十九世紀後半のチェコの読者は、日本をややエキゾチックな国として見なすようになった。

このような雰囲気の中、一八八一年九月四日にムラダー・ボレスラフ近辺のポトゥコヴァーニユ村のビール醸造所でヨゼフ・ホロウハが生まれる(ヨエ・ホロウハは筆名である)。ホロウハの父、同名ヨゼフ・ホロウハはビール醸造業者であり、一八八五年に家族と共にロウドゥニツェの近くにあるリボホヴィツェに引っ越し、若きホロウハは小学校に通い始める。八歳弱にして、弟カレル(後にSF作家になった)と共に小説家になりたいという希望を抱いた。後に、ムラダー・ボレスラフ市立高等学校で学び、高等学校二年生の時に A. Brasey 著『世界周記』とヒューブナー著『世界周遊記』<sup>8)</sup>を読み、感銘を受ける。一八九四年の冬に高校三年生に母方の親戚であった、



イカワから、夫と共にヨーロッパを巡業するヤマグチ・トクコが、ベルリンの Passage Theatre で奈落へ転落した際に傷を負ったという紹介状をもらっている。プラハに保養に来たヤマグチ・トクコはホロウハ曰く「日本語しか話せなかったので彼女のプラハ滞在は私のためになされたものようであった。日本演劇の謎を解き明かしてくれて、また日本の民話など、ヨーロッパではなかなか知る事のできないことをいっぱい教えてくれた」と記述している。

ホロウハは第一次世界大戦中に執筆し、蒐集を整理するなど、独学を続ける。戦後に日本を経由して帰国したチェコスロヴァキア軍団の兵隊たちと交流し、自らの蒐集活動を深める。一九二四年にプラハ郊外のロストキで「ヴィラ・サクラ」と名付けたホロウハ邸を建て、日本庭園を造園してもらうが、一九二六年に手放し、プラハのスマーホフ区ナ・フジェベンカーフの一軒屋へ引っ越す。「ヴィラ・サクラ」は後に人氣のレストランになった。一九二九年に *František Mlích* の設計によってその隣接する土地に四階建ての豪華建物「ヴィラ・ヨコハマ」が築かれ、保養施設として人氣を集めていた。

一九二四年にホロウハは弟カレルと一緒にアフリカへの旅をして、一九二六年五月から十二月にかけての二回目の来日を実現する。日本に到着する前に上海(二週間滞在)、香港(一週間)。そして、神戸(二週間)、横浜、東京(二ヶ月)、広島(三週間)、京都(二ヶ月強)、再び東京(二ヶ月)へ移動して蒐集活動を行う。帰路はカナダを経由した。ホロウハは、注へ自らの最大の夢、日本人女性を妻にしチェコへ同行することをもはや叶えることが出来なかった。一九三四年に、チェコ写真界の大家、ドゥルチコルのスタジオで五十三歳を迎えたホロウハは、自らの全裸写真を依頼し数枚撮ってもらった。この事実を、今年の七月に東京で出会ったニューヨーク在住のチェコ出身美術史家ヤロスラフ・アンジェル氏から教えられた。晩年のホロウハの心境を知る上で貴重な情報であろう。なお、二回目の在日滞在から、袋綴じ特装本として出版された『日本の子供たちのおとぎ話』(*Pohádky japonských dětí*, 一九二六年)、『微笑みを売る女たち』(*Prodačky usměvů*, 一九二九年)、『神と鬼に囲まれた』(*Mezi bohy a demony*, 一九二九年)、『日本の女性たち』(*Japonskéky*, 一九三一年)、『寺が千棟のある街』(*Město tisíc chrámů*) が生まれ、後に中国を題材にした『愛の園』(*Zahrada lásky*) が出版された。なお、ホロウハは『愛の園』の映画化を企画したが実現しなかった。

ホロウハは一九二七年からヨーロッパ各地の美術館をまわり、顧問を務める。『ヨエ・ホロウハ叢書』(*Soubor spisů Joe Hlowky*, 八冊、一九二九〜三六年、未完成)、『北斎』(*Hokusai*, 一九四九年)、『ニッポン』(*Nippon*, 遺産で原稿のみ、未完成・未出版) が彼の最後の著作となった。

ヨエ・ホロウハは正に日本を愛する人物だった。一生を日本にのみ捧げ、一度も正式な結婚をせず、一九五七年六月十三日に享年七十六歳で永眠した。第二時世界大戦中にプラハの文部啓蒙省に隠蔽した美術コレクションは、解放後、無傷でもどつたものの、晩年、一九四八年に起こった共産党クーデターがもたらした恐怖政治の時期と他の国民と同様に対面せざるを得なかった。億万長者税を課され、豪邸から一般のアパートへと引っ越しをやむなくされ、また通貨改革に莫大な財産を奪われた。

ホロウハの執筆によるセンチメンタルな物語の背景には日本通の知識を感じることが出来る。二〇世紀前半のチェコにおいて日本を知らしめたことというホロウハの貢献は大きく評価したい。また、日本を題材に蒐集活動家としてチェコで一番大きな日本美術コレクションを築いたことで彼を超えたものはないだろう。

### 三 『恐怖の東屋』

『オエヴァイナリダイミョウジン』は一九二〇年にプラハ、スマーホフ区にあったヤン・コチーク(Jan Kouck) 出版社から発行された、ヨエ・ホロウハ著の『恐怖の東屋』(チェコ語題: *Panion hrady*) に収録されている。興味深いことに、そのまま日本語を音声的にローマ字に直して *Ojwa-Inari-Daimyōjin* と標題されている。また、主人公であるお岩は本来なら *Ojwa* ならぬ *Ojwa* (オユヴァ) と音便化されている。当時のホロウハにはこう聞こえただろう。『オエヴァイナリダイミョウジン』への小生の思いが蘇ったのは、二〇〇三年三月にプラハに一時帰国した時だった。小生は長年にわたって探し求めていた『恐怖の東屋』の有無を探る際、プラハのナーブルステク博物館に一冊が所蔵されていることを同博物館の学芸員、アリツエ・クレメロヴァー氏に教えられた。しかも、小生が後に手に入れた蔵書とは違う、ホロウハの友人への、いわゆる配り本(特装本)と思われるものであった。

小生の手元にある『恐怖の東屋』は百三十二頁、一七二×一七二のものであり、その装丁と挿絵(図5)を手掛けたのは、チェコの画家であったオタカル・シュターフル(Otakar Štáhl) である。シュターフルはチェコのヴィソチナ地方のハヴリーチユクラーフ・プロット、木細工職人の家で一八八四年に生まれ、高等学校を自ら中退した後、一九〇三年からプラハに移り、フェルディナント・エンゲルミュレルの門下として風景画を学んだ。早く日本の版画に魅せられ、その手法を自らの制作に取り入れた。なお、その作風にはアール・ヌーヴォーの風を吹かせ、一方、一九二〇年代頃に勃発したチェコのアヴァンギャルド派とは異なる道を歩んだ。日本趣味的文学をはじめとする所謂エキゾチック風味の出版物(旅行記)や青年向けSF小説、おとぎ断などの挿絵師として活躍したシュターフルは妻とともに、一九四五年二月十四日にプラハ空襲の犠牲となった。アトリエの戦災で消滅されなかった一部は現在、ハヴリーチ

ユクローフ・プロット市のシユターフル記念館に保存されている。なお、シユターフルとホロウハとの協力のきっかけは、一九二二年から一三年にみられる。ホロウハは自らの著書、『死神の接吻』(Polibky smrti)のため、チェコの保守的な嗜好に合わせ、日本の挿絵技術をそのまま模写せずに描いてくれる画家を募集したところ、シユターフルを紹介された。こうして作家ホロウハと画家シユターフルの協力が始まった。シユターフルはまた、ホロウハのコレクシヨンに強いインスピレーシヨンを受け、ホロウハの他の表紙絵や挿絵を担当した。『恐怖の東屋』のために、頁の全面を覆う絵を七枚と、小さな挿絵を六六枚も手掛けた。口絵として龍や、地に三つ扇の家紋を散らせ、燭台を描いた。別の口絵には草花を縁に、「すみは餓鬼にすらせ／筆ハ鬼にとらせよ」という諺が日本語で書かれている。垂直に書かれた日本語の下に、水平にチェコ語(ローマ字)による読み方とチェコ語訳が書かれている。この口絵を更に捲ると、左膝をついた男が背負う大きな鏡には「時は明治、十月の某深夜の頃、東京の赤坂の東屋にてムラカミ・サゴロウ氏が友達の息子七人を相手に、恐怖及び臆病を放棄させんと語った七短編である」との文章がチェコ語で書かれている。

なお、ナープルステク博物館が所蔵している『恐怖の東屋』は、特装本で配り本として友人に贈呈していた本であろう。その装丁は一般に売られたものと違い、豪華である。驚くことに、その表紙にホロウハは日本で蒐集しチェコに持ち帰ったであろうと思われる浮世絵を二枚使用している。この絵については、表(図3)は落合芳幾の『百物語・雨女』で、裏(図4)は長澤蘆雪の幽霊画だと思われる。恐らく、ホロウハ自身によって選ばれた絵だろう。表の表紙の幽霊は筋が浮き出た顔で、口を大きく開け、歯に鉄漿をかけている。薄い髪は撫肩にかかり、瘦せこけた胸に肋骨があらわになることよって凄味が増されている。早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵の落合芳幾と落款された図と比較すると、差異が感じられない。「百もの語」「一六」の文字が削り取られ、原図をもとに模写されたものと思われる。また、「雨女」と書かれてある個所の左に著者名と標題が書かれている。なお、この図は、もともと北斎の傑作怪奇図「百物語」シリーズ(一八三〇年頃)を芳幾が模写したものである。裏表紙の図は、眼を左上に睨み、大きな歯を食い縛ってみせ、尖った爪を伸ばしたひよろひよろの手を胸元の前に痙攣したかのようにみせている幽霊である。図の左側に「蘆雪画」の署名に「芳幾模写」という落款がある。これも原図をもとにあらたに模写されたものであろう。

表紙の基になった絵をプラハで探つてみた。ホロウハが蒐集したものは生前に一九五四年にプラハ国立美術館、ナープルステク博物館それぞれに寄付され、その代価として、国から年金を支給された。国際日本文化研究センターは「海外日本美術調査プロジェクト」として『ナープルステク博物館所蔵日本美術品図録』と『プラハ国立

美術館所蔵日本美術品図録』とを一九九四年に発行したが、『恐怖の東屋』に使われた二枚はその中に見当たらない。ホロウハが生前、ベルリンなどで行なわれたオークシヨンで売りさばいたか、友人に贈ったのだろうか。小生はこの絵の情報を今のところ得ていない。

ホロウハは、何故に百物語をテーマにした図を選択したのだろうか。他の著書に蒐集した広重などの浮世絵を高度な印刷技術を使って紹介しているものもある。しかし、百物語の図は『恐怖の東屋』の表紙に使われたこの二枚のみである。ホロウハがチェコに持ちかえったであろう異界をテーマに描かれた作品のうち、ナープルステク博物館に歌川国貞二代、歌川貞秀、都遊の合作「江戸花名勝負」のうち「四ツ谷」、歌川豊国初代の尾上菊五郎・岩井糸三郎の幽霊、猿雀の市川米蔵のお岩、春好斎北洲の尾上菊五郎の幽霊、歌川国芳の「昔ばなしの戯 猫又年をこへて古寺に怪をなす図」、掛軸としては桃湖の幽霊図などがあり、全長三〇センチ程の人魚(猿の首に魚の胴体に鳥の足)も所蔵され、実に様々である。クレメロヴァー氏から教えられたが、件の図だけは不明のままである。

『恐怖の東屋』の冒頭に、「一九某年十月六日、東京にて」と書かれている。当日、ホロウハと思われる本書の主人公は帝国病院の医師であるムラカミ・ゼンゾウ(原文チェコ語、ローマ字)から、明日(十月七日)に行われる予定の「オヒマチ」の会へと誘われた。昔話を語ってくれたのは、ゼンゾウの父上である、赤坂在住のムラカミ・サゴロウだった。主人公は八才から十二才の青年たち七人と一緒に、茶の湯用の東屋に招かれ、七つの話に耳を澄ます。話が終わる毎に、青年一人一人は暗い庭園を通過して、家の離れにある一室に置かれた灯台の灯心を切り、勇気のしるしとして帰るといふ設定になっている。なお、日待とは、人々が集まり、前夜から潔斎して一夜を眠らず、日の出を待って拝む行事。普通、正月、五月、九月の三、一三、一七、二三、二七日、又は吉日を選んで行うというが、毎月とも、正月一五日と一〇月一五日に行うともいい、一定しない。日本民俗大辞典によると、日待とは、特定の日に集まったり、或いは籠りをしたりすること。講が組織されて行なわれていることが多い。特に庚申、甲子、巳の日などに集まる日待はよく知られている。いくつかの禁忌があり、例えば、日待に出席するものは出席前に必ず風呂に入浴すること、庚申の夜は男女同衾をしてはならないこと、精進料理を食べることなどがある。ホロウハは日待の形式を取り入れながら、百物語——数人が集まって怪談を語り、百の灯心を入れてともし、一つの話が終わる毎に一筋の灯心を消していく——という形式を自ら解釈しながら紹介している。ホロウハによるオヒマチは次ぎのように説明されている。

「このオヒマチは我が国では全く知られていない習俗である。侍の子供たちは古代のスパルタ人のように教育された。この習俗は日本の中世から、今日に伝承されてき

たものである。その昔、決められた日の深夜に幾人かの青年が先生の下に集い、離れた寂しい一室で、先生に語られた怪談を耳を澄ませた。怪談の休憩になると、若き聴衆は墓所や処刑場、幽霊屋敷と噂された家に行かされ、目的地に達した標に、事前に決められたものを持ち帰らなければならなかった。維新の際に武士階級が廃止されると、これらの「恐怖の宵」は、内氣と臆病を放棄するために、愛国心のある家庭に於いて、さほど厳しくない形で残された。<sup>43)</sup>

ホロウハは「日待」を題材に、七つの小説に纏めている。その内容を簡単に紹介しておきたい。

一)「盗まれし塔婆」(UKRAJENÁ TOBA) ……………一八頁  
江戸時代文政のころ、侍たちは京の南禅寺の近くで日待を催し、一人は黒谷へ敵の墓の塔婆を取りに行かせられ、敵の幽霊に追われて死ぬ。

二)「ある暗き夜の出来事」(HISTORIE JEDNÉ TMAVÉ NOCI) ……………一六頁  
上杉謙信は刀磨ぎ師イトウ・ゼニエモンに名刀正宗を修理に出す。イトウ・ゼニエモンは陰謀者によって銘刀を奪われ自決する。虚無僧に身をやつした娘スミは父の仇を討って名刀を謙信に返し、自ら入水して果てた。

三)「婚礼」(SVATBA) ……………四六頁  
貧乏暮らしのチョウウマツの娘ユキはその主人の息子と恋愛結婚をし、嫁入り道具の金貨まで贈られる。ヤマグチャ・セイベという呉服屋で婚礼衣装や蒲団などを買った。ある日、日干しをした道具は突然の豪雨にあり、色が落ちてしまう。呉服屋に騙されたことを知って、親類に苛められたユキは川に身を投げた。川からすくい上げられたユキは死ぬ間際に娘を産んだ。何も知らされていなかった娘は吉原の大文字楼に売られ、タカオ太夫になった。ヤマグチャの息子セイゾウに出会い、許されない愛は破綻に向かった。タカオは自害、何も知らないセイゾウがフジエという女性と結婚すると、その夜、タカオは幽霊となって現れる。タカオの死を知ったセイゾウは自決、その妻も自殺する。呪いを掛けられたヤマグチャに仇が打たれた。

四)「坊主の首」(BONZOVA HLAVA) ……………七二頁  
尾張大名の侍、ウシヨウベン(右少弁)トシトモは剣豪、酒好き、そして囲碁の名手として知られた。ある日、狩りに出て鹿を追うところ、坊主に出会った。囲碁に誘われたが、負けてしまった。二回も三回も。そして、激怒のあまりに坊主の首をねた。その時から碁盤を見る度に刎ねられた首が現れ、ウシヨウベンは苦しめられた。大名と碁に誘われたウシヨウベンは碁盤を持って来ると、そこに腐朽した坊主の首があった。坊主の殺人が露頭したウシヨウベンは無数の矢で非業な死をとげた。

五)「仏陀の涙」(BUDDHOVY SLZY) ……………八三頁  
サヘイは母の希望により剃髪し光明寺に入った。お寺の奥の方にあった古い仏堂の

仏像に心を奪われた。さびれた仏像をきれいにし、毎日花を供えた。ある日、仏像のダイヤモンドで作られた眼を奪いに来た他の弟子に出会い、盗人を追い払う。サヘイの母は死に際に大家に家賃の代わりに渡した数珠を手に巻いて葬りたいといった。大家に数珠を返すまいと言われたサヘイは仏像の前で懺悔して泣き崩れた。すると、仏像の手が動き出し、仏像の目からあふれ出る涙をめぐらした。滴った仏像の涙は小石に化し、サヘイはそれを持って数珠と交換しようと思った。どこで拾ったかと聞かれたサヘイは素直に答えた。しかし、数珠を返してもらえなかった。大家が仏像の涙を取ろうとすると、仏像の手に遮られ、大家は死んだ。大家の亡骸の袂から数珠が落ちてきた。

六)「オウヴァイナリダイミョウジン」(O-JUVAINAR-DAIMJODZIN) ……………九五頁  
本稿の付録として拙訳を参照。

七)「青い燈籠」(MODRÁ SVETILNA) ……………百十七頁  
大名の奥方がある夜に霧に覆われた西の沼で青い燈籠の光を目にし、欲しくなった。大名はサカモト・コマジロウに、燈籠を持って来るようにと命令した。サカモトは燈籠の持主キヨナガを矢で射殺し燈籠を奪った。キヨナガの訪れを待っていたタミコは彼を三日も探し、ようやく浮き上がった遺体を発見した。愛しい人を抱き、一緒に沼へと沈んだ。その夜から、青い燈籠の光が消え、奥方は濡れた服の女性が来る夢をみるようになった。女性は恋人の燈籠を探していると言った。それ以来、燈籠の光を奪いに来る幽霊が現れ、射られたサカモトの矢で下女を殺して消える。サカモトは犯人とされ自ら首を刎ねて死ぬ。後にタミコの幽霊は奥方の前に現れ、全てを解き明かす。奥方は燈籠を二人がなくなった沼の柳に供え、剃髪して尼となった。

#### 四 ホロウハと「四谷怪談」

ホロウハが実際に『四谷怪談』を観劇したかは、今の所不明である。『恐怖の東屋』は一九二〇年に出版された為、もし観たと仮定するならば、一九〇六(明治三九)年三月初旬から八月初旬までの間になる。上演資料集『東海道四谷怪談』によると、東京台東区千束町にあった宮戸座の八月興行に『雨夜鐘四谷怪談』が出ている。ホロウハが、これを見たかどうかは不明である。彼の著書に歌舞伎の観劇について記述があるものの、演目は指定されていないので、断定は出来ない。

また、ホロウハが題材をどこから得たかは今のところ不明であるが『オウヴァイナリダイミョウジン』は、冒頭に前述したチエコで紹介されて来た三つの『四谷怪談』のうち、一番恐怖に戦かせてくれる話である。

『於岩稲荷来由書上』に記されている『重キ抱瘡相煩ひ片眼盲シ勝れて醜婦』や、『四谷雑談集』にある「この娘の性質はいたって悪かったので、誰一人嫁にしようという

人もなく、そのうち二十一歳の春に疱瘡を煩い（省略）ひどいあとがのこつて、顔は洪紙のようにざらざらになり、髪は年にも似ず白髪混じりに縮み上がつて枯野の薄のようになり、声はなまつて狼は友を呼ぶような音になり、腰がまがつて松の枯木のようで、その上片目がつぶれて、（省略）その見苦しさはたとえるものではないほどであつた」とあるに對し、ホロウハのお岩（オユヴァ）は貞節で、忠実な女性であり、夫イエモンに子供を与えることに使命と義務を感じている。醜くなるのは、鶴屋南北作『東海道四谷怪談』伊右衛門浪宅の場と同様、薬を飲んでからである。ホロウハはその様子を「血は彼女の血管を一際早く循環し、鎔けた鉄みたいに熱かつた。彼女の口が脹らみ（省略）髪の毛の半分を失つてしまつた。そして、脹らんだ歯茎では歯もはや歯も抜けることをも覚悟した」と書いている。鶴屋南北の傑作とはやや違い、創作的な箇所もあるが、主題はいかされていゝ。すなわち、お岩の髪梳きこそないが、顔に瘡ができ、眼が飛び出し、髪の毛が抜けて、爪がはがれる、毒薬を飲まされてお岩が醜く変貌するといった怪奇現象がこの小説でも魅力となつてゐる。特に、爪が剥がされる部分「枝から熟した果実であるかのように落ちていつた」の描写などは傑出してゐると思ふ。

お岩が伊右衛門の子を産む設定も、『於岩稻荷来由書上』や『四谷雑談集』などの実説には見られない。これも『東海道四谷怪談』に拠るものである。伊右衛門が、赤子を抱くと石の地蔵になる趣向も、同じく『東海道四谷怪談』を踏襲したもののだが、『今昔物語』（二七、第四十三）などで知られる「うぶめ」の習俗伝承を踏まえて脚色されてゐるところにホロウハの特色を見るべきなのであらう。

また、『於岩稻荷来由書上』、『四谷雑談集』、そして『東海道四谷怪談』と相違ある結末——イエモンは改悛して剃髪することによつてお宮は建立される。この結末はホロウハの創作と思われる。日本をこよなく愛した、ジャポニズムに憧れたホロウハの、これが『四谷怪談』の受け止め方だつた。

#### 付録

ヨエ・ホロウハ著

オ・ユヴァ・イナリ・ダイミヨウジン

ペトル・ホリー訳

主人の方を恭み深い眼指で見て、オユヴァが言つた。

「男の子が生まれることを信じております。いや、男の子を生むに違ひないのです。この私が三十路になつて、旦那様に相続人を差し上げられるなんて、この上ない喜び

にございます。」

と彼女の声は喜び、そして愛で震えていた。

タミヤイエモンは、無上の幸福で微笑んだが、何も言わなかつた。子供をもうける、男の子の子孫に恵まれるという希望をとくに諦めていた。彼に名を継ぐべき相続人をなかなか献げる事が出来ないでいる妻が故に、若いメカケでも家に呼ぶことさえ考へていた。今は、妻の予測、そして喜びに満足していた彼である……。オユヴァは静かで貞女だつた。自らの懐妊を計り知れない家宝であるかのごとく大事にしてゐた。一秒一秒、旦那様に満足してもらへるよう、貞節な愛を育んでゐた。彼女の素朴で空虚な人生は今、新しい、そして重大な出来事で満たされることだらう。母になることはそういう事である。彼女は、健康で強い男の子を生むことが誇りであることを知つてゐた。他の若い女を振りかえつたり、芸者と遊ぶことを好む主人だがきつと喜んでくれるだろうと、彼女は嬉しくてたまらなかつた。

常から女性にもてはやされた美男、怖れを知らない、なかなかの腕前の剣士タミヤイエモンは近頃、仙台の国の大名に仕えるという良い職を辞し、今は収入も職もない浪人の身の上であつた。彼が東京をさ迷つてゐる間、善良で静かな妻のオユヴァは、彼が自分の所に帰るまでの時間を数えるばかりだつた。彼女は、主人が物のない生活へと彼女を陥らせたことで非難をしなかつたし、貧苦に近い暮らしをさせ、そして貧乏な地区に居を構わなければならぬようにさせたことで嘆いてもいなかつた。貧乏に陥り、オユヴァが、亡き親から譲られた愛着のある家宝を次々と売り飛ばさざるを得ない時や、日本橋から貧乏人が棲んでゐる四谷へ引越せざるを得なかつた時も、彼女は悲嘆に暮れることがなかつた。主人に欠点があつても、彼女は、彼に對して大きく、忠実な愛を抱いてゐるのだつた。

彼女は苦しむ、そして黙つてゐた。タミヤは自らの氣質を、息子の誕生によつて変える、武士という職に再び戻る、そして家族はまた豊かになる、と彼女は信じてゐた。太陽と喜びが溢れる春がやってきたものの、家族の苦しい状態は、以前と同じであつた。貧窮そのものが彼らの家に居座りそうになり、家族の一員になる事を追つてゐた。初めて生まれる子が、このように悲しい日々の中で世の光を見ると思ふと、彼女はくやしくてたまらなかつた。

飛鳥山と向島で桜が咲き乱れた。誰もが桜をほめたたえに行つて、どんなに悲しい顔でも楽しくなり、どんなにおとなしい唇でも桜の美しさでよみがえつた。

ただオユヴァだけは家から出かけなかつた。子供の誕生に備へて、留守中の主人を思い巡らしながら貧苦に陥つた家庭で家事をしてゐた。タミヤイエモンは町を一人で、ただあてもなく放浪してゐた。張り裂けた彼の心の内は、どこへ行つても、家にいる静かな真心を尽くした妻のところへさへ、平安を見出すことがなかつた。彼は、

彼女の前で自らの貧しい、絶望的な立場を恥じていた。妻を冷淡な目で見はじめた。こうして考えるうちに、彼は、隅田川岸にある満開の桜の並木に着き、その美しさをほめたたえる群衆に合流した。そこにあつた色と音の混沌、喜びと感嘆の声の渦巻によつて、彼の思いは静穏になつた。人生で、一度も涙を流したことはないようにみえるほど美しい微笑みを見せる少女たち、以前に何の心配も掛けられた事のないような、輝いている笑顔の親たちの姿が彼の目に映つていた。タミヤが注目したのは、少し離れたところに座つていた数人の集まりだつた。サムライ一人と女の子四人。彼らは、木の下、桜の満開の梢の下に腰を下ろし、金銀の細い紙に句を書いて、これらに書かれたのだった。春、太陽、桜花、鶯のさえずりなどをほめたたえたものだった。句を読み上げる女の子たちの歌声にタミヤは耳を済ませていた。

タミヤを見掛けたサムライは、彼を招いた。そして、タミヤイエモンに自らを紹介した。日本橋に居を構えた、將軍家に職を持つお金持ちのサムライのイトウジュウベイであった。美しき娘のツユとその三人の女友だちも紹介した。

皆は、誰にも邪魔されずに遊んでいた。

そして、女の子たちは再び、春、太陽を詠った句を書き、これらを咲き乱れる桜の枝に吊るした。タミヤイエモンは彼女たちを手伝つた。彼は機転のきく、詩にも優れた人物で、やがて、自らの詩で皆の称嘆を得ることができた。艶やかなツヤは彼の句に、タミヤイエモンは彼女の美しさに感嘆した。

日が暮れた。桜の花はほとんど見えなかつた。そこら中に、群衆がブンブンという音で沸き上がり、提灯のともし火がしみ出していた。

タミヤイエモンは新しき友に別れを告げた。「何と美しい、何と美しい」と帰りながら、もの思いに耽つてつぶやいた。

貧乏の町、四谷、静かで忠実な妻のところへ帰つていった。彼はもしや職探しにでも出かけていたのではと思ひ、妻は彼を嬉しい気持ちで迎えた。

「旦那様、熱いお茶をどうぞ。お体を温めて下さいませ。まだ春先で、夜はまだ涼しいのです。」と主人の前に畳に熱い飲み物を置きながら言った。

しかしイエモンは何も言わなかつた。すでに萎れていく妻を見ながら、サムライであるイトウジュウベイの美しき娘ツユを思い出していた。

彼は、額を厳しい現実でしかめた。

善良なる妻オユヴァには、主人の突然の気持ちの変化がわからなかつた。ただ「願わくば、早く子供を」と感情を込めてそつと独り言を言った。

明るる日に、イエモンは、再び向島へ桜の花見に出かけた。きっと、自らの切望の的、美しいツユに再び逢えることを信じていた。彼女はまた父とともに参加していた。

今回は川に浮かぶ、提灯、花と布の窓掛で飾られた船に乗っていた。彼らは、一緒に船に乗るようにとイエモンを誘つた。心踊る一日であつた。春の太陽は血を温め、そして欲望をすべて際立たせた。日が暮れるや否や、イエモンは美しきツユに永久の愛と忠実を誓つた。そして、彼女もまた貞節な愛の誓いを立てた。

イエモンは彼女に惚れ、変わった心境で家へ帰つて行つた。すべては暗く、そして貧しく、家は空虚で、妻は素朴、そして悲しく、と彼の目に写つていた。

おそらく彼は、不機嫌で、いらだつていたであろう。

簡素な食事をとり、煙草の気分でもなく、お茶も口にしなかつた。

そして、家と心配に耽る妻を離れ、自らの若き恋人を思い出しながら夜中町の道を放浪して歩くばかりだつた。

將軍家のサムライの娘ツユもまた、イエモンに死ぬほど惚れてしまつた。

彼女の父はイエモンを、その真つ直ぐな、軍人的な気質のため、また知る人ぞ知る剣術の腕前のために好きになつた。これが故に我が娘の愛を祝福した。

愛しいイエモンが、既に結婚していると知つた美しきツユの憂は、想像に値しないものだった。

「私はメカケになりたくない、それより死んだ方がましです。」

と叫びながら日も夜も泣き崩れた。

そして、イエモンの事を一層愛するようになった。父に慰められても無駄だつた。明るる日にイエモンは彼らの家に来た時、涙を流している女子に言つて喜ばせた。

「我妻が、もし男の子を産んでくれなければ、離縁するつもりだ。そして貴方だけが私の愛しき婦人へとなるのだ」

「しかし、もし男の子であれば？どうなりますか。」

と彼女の悲しみに耽つた涙ぐむ眼が聞いていた。

しかし、愛しい人の請け合ひの言葉は彼女をやや静めた。

それから、固い心の持主であつた日和見主義者のお金持ち、彼女の父は、我が娘の幸せの生きた障害物を、いかにして始末をつけるべきかを考えたのだった。

明るる日は、知られた膏藥売りや敷医者、その四谷の掘建て小屋まで訪ねた。二人きりになつて、紙で作られた壁の後ろに誰も立ち聞きしていないのを確かめてから、来た旨を打ち明けた。

「誰かを処分しなければならぬのだ、お前！浪人、剣士のタミヤイエモンの妻をだぞ！ちよつと良い時だ！出産を時期に！男が生まれようとも、女子が生まれようとも構わん！タミヤの了解があるさ！金も持つて来た！」

と言つて、卑しい男に金貨でいっばいの絹袋を渡した。

しかし、タミヤの了解どころか、このような下心について、何も知るよしもなかつた。

た!

念願の子供が世の光を見る日が早く近づいていた。

主人に辛くされつつも、優しい言葉や微笑み一つも得られなかったとしても、オユヴァは喜びの日々を過ごしていた。

彼女は今、長い年月を経て、女性として、そして妻としての義務を果たすべく、不機嫌な主人に男の子を与えることを喜びに思った。

「嗚呼、私はなんて幸せなのでしょう、なんて幸せなのでしょう」と、自らの孤独さに繰り返し返していた。

そう思ううちに、小さな楓や松が風になびかされる、小川がさらさらと流れる庭を眺め、我が子が、これらすべてを見て、どれだけ喜ぶだろうかと思ひ巡らした。

一方、タミヤイエモンは帰宅を避けるようになった。春の暖かい日をツユとその父の一行と過ごしていた。彼の愛は、日に日に成長していった。善良で忠実な妻オユヴァの事を忘れていった。

そして、オユヴァが横たわった。

子供が生まれるのを待って、節約し、食糧不足で体が弱っていた。

タミヤは彼女を、その恐怖や痛みの中に残した。こんな時でさえ、恋人との出会いを絶つことがなかった。哀れな女性の世話を貧しい隣人がするようになった。

夕方に子供が生まれた。男の子だった。健康で、美しい男の子だった! オユヴァは喜びのあまりに気が抜けそうだった。

その夜は力を写えてくれる健全な眠りに耽った。明くる朝、四谷から膏薬売りのチクワンが、腹の黒い人ならでは、忍び寄る歩き方でやってきた。オユヴァは醜い男にびびりした。

「主人様のイエモン、タミヤイエモンに頼まれて来ました。貴方を強くする薬を持って参りました!」

と言って、小さな土瓶とお猪口を差し出し、女性がしばしば出産時期に使うサフランの葉に似たような、紅の液体でお猪口をいっぱいにした。病人にそれを渡すときに、じっと彼女の方を見詰めた。

薬を信頼したオユヴァはひたむきに飲んだ。

「直に良くなる、完全に良くなるよ!」

と言っただけで、やがて薬売りは病人と別れた。

我が子の傍に無理して再び眠りについた。

彼女は日が暮れ行く時刻に目を覚ました。空腹の赤ん坊は泣いていた。彼女は頭痛で、体が朦朧としていた。

赤ん坊に母乳を飲ませ、蚊帳の中で蒲団の上に寝かせ、その傍に横になった。主人が帰るのを待っていた。緑色の蚊帳を飛び交う蚊がピーピーと音を立てていた。地に飢えた生物のブンブンと立てる音の他に何も聞こえなかった。家は空虚で静けさに満ちていた。

その晩遅く、イエモンは帰ってきた。

二日間も留守にした主人を迎えんとオユヴァは蒲団の上でよろよろと体を起こした。

「旦那様、御覧くださいませ! お子様です! 息子です、貴方様の息子です!」と喜びに満ちた、ふらふらした声で言った。

タミヤイエモンは部屋の片隅に立ち止って、子供の方にうとうとしく眼をやった。「息子か、本当か!」

と、彼の思いは今、日本橋の恋人のところにあることを打ち明かす、喜びのない、濃淡のない声で言った。

静かに立つたまま、母と子を見ていた。近づかず、子供を抱擁せず、その病気をわずらう、貧弱な母を楽しもうともしなかった。

オユヴァの眼には、イエモンは行灯のどんよりした光で大きく、硬直で、幽霊に似ているかのように写っていた。

疲れて、オユヴァは再び寢床に横たわった。赤ん坊は目覚めて泣き出した。

タミヤイエモンは一言も言わずに家を出た……明くる日に、オユヴァは全身の苦痛で目が覚めた。頭を重たく感じ、まるで鉄で出来ているように思えた。彼女の細い首で支えられないほどだった。

主人は夜に家に帰らなかった。その床は空だった。雲って、物寂しい一日だった。

彼女は寢床から体を起こし、家に誰かが入る前に、その身形を整えんとした。近くに落ちていた鉄の鏡にかりうじて手を伸ばした。しかし、鏡の中に写った自分の顔を見た瞬間びびり仰天! 何かの妙な病で脹らんだその顔中は、醜い赤と青の痣で覆われていたのだ。彼女の、本来は美しく、貞節な眼はいつもより大きく、むくんだ脛から出ようとするように見えた。彼女は自分自身に脅えさせられてしうがなかった。

せめて容貌を少しでも拵えんとして、彼女は乱れた髪の毛を梳こうとした。しかし、櫛を髪の毛に通したその時に、髪の毛の房はその手に残ってしまった。自分の目を疑うかごとく、二回目には梳くと、髪の毛の房が次ぎから次ぎへと頭から抜けていった。

恐怖に征服された彼女は再び寢床に横たわり、苦い涙を流していた。今となって、自らの恐ろしい病を実感していた。血は彼女の血管を一際早く循環し、錆けた鉄みた



